2019.9.11　毎日新聞奈良版

やまと 民俗への招待

チャガユとカタカナ

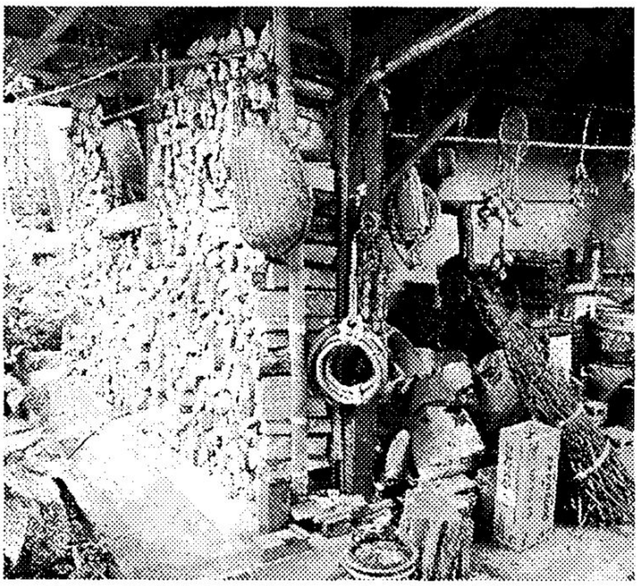
鹿谷　勲

大和郡山の歌人喜多隆子さんから短歌誌『ヤママユ』最新号をいただいた。発行元の山繭（やまゆ）の会は吉野に暮らして歌を詠んだ前登志夫（1926―2008）が主宰した県内有数の短歌結社だ。その中に榎幸子歌集『わがものならず』を批評した藤原龍一郎氏の「日本語の魅力綺羅めく」が掲載されていた。

批評の対象にあげられた歌の中に、「言霊も歴史もふふむと思ふなりそを捨てられし地名を偉む」、「お山する柴する薪するおなりする名詞が動く登志夫の世界」があった。二首目は「評論にしてもよい発見をストレートに歌にしてしまう気概には敬服する」と藤原氏は評する。「名詞が動く」とは面白い表現だ。

民俗学にかかわる者として、地名や物の名は大変気になる。土地により発音が変化し、それに漢字が当てられ、意味が変化するので、安易に漢字を当てることは怖い。そこでまるで外国語のように「オナリする」と民俗語彙（ごい）を敢（あ）えて片仮名で表記することが多い。

オナリという言葉は、東吉野村大豆生の西上家で私は初めて聞いた。ここで私はチャガユを初めていただいた。オナリするとは炊事をすること。かつて炊事役は主婦というより、家のおばあさんが務めたので、オナリバアサンと言うとその時に聞いた。沖縄で兄弟が姉妹を指していうオナリを思い出し、奥吉野と沖縄が繋（つな）がったと思った。



美しく積まれた割木、中央には米を洗うイッカケ、右奥はカマド。奈良市田原の岡井家にて＝筆者提供

「お山する」とは、後の言葉からすれば山仕事の意だろうが、「山行き」は墓穴を掘ることを指すこともある。柳田国男の『葬送習俗語彙』を見ると、墓地を「山」と呼ぶのは古く、埋葬を「山仕事」「山拵（こしら）え」、大和東北部の山間部では、墓穴堀りを「ヤマシ」というとある。

先にチャガユと書いたが、明らかに意味が分かる言葉までなぜわざわざカタカナでと思う人もあるかもしれない。大峯山の山懐に生まれた父のことなどを回想した『やまとの茶がい』という随筆集（阪本松子、1969）がある。知り合いの東大寺長老から「茶がゆ」だと指摘されたが、著者はあえて方言で「茶がい」を題名とした。「茶がゆ」では表現できない、父とふるさとを喚起する深い心情が、この言葉にはあるのだと思う。「言霊や歴史をふふむ」のが、土地の言葉であり民俗語彙だ。大切にしたい。

（奈良民俗文化研究所代表）

＝次回は25日